

アメリカ黒人文学における都市

——アン・ペトリ『ストリート』の場合——

一、アメリカにおける自然と「都市の形成」

一四九二年のコロンブスによるアメリカの「発見」から一世紀以上が経過し、一六〇九年イギリスによるアメリカ植民が開始された時には、言うまでもなくアメリカには多数の先住民が住んでいた。「アメリカ・インディアン」と呼ばれるこれらの人々は自然の中で、自然を畏敬しながら暮らしていた。そうした自然の土地アメリカにやってきたヨーロッパの人々は、ヨーロッパに倣って人工的な都市（町）を作り上げる。こうしてボストン、セイラム、フィラデルフィアなどの町が作られ、一六六四年にはオランダ領ニューアムステルダムがイギリス領となりニューヨークと改められる。独立戦争（一七七五～八一一年）、エリー運河の完成（一八二五年）、第一次移民流入（一八四〇～五〇年代）などによりニューヨークは急速に都市として成長していく。その当時のニューヨークのようすは例えばビデオ『ギャング・オブ・ニューヨーク』（二〇〇二）などで知ることができる。

元来アメリカ大陸は極めて自然の豊かな土地であったが、一八二〇

年代から始まった西部開拓や東部の都市化などにより、自然の破壊が進行していく。これに敏感に反応したのがラルフ・ウォルドー・エマソン、ウォルト・ホイットマン、ヘンリー・デヴィッド・ソローなどロマン主義文学の作家たちである。エマソンの『自然論』（一八三二）やソローの『森の生活』（一八五四）は、自然賛歌として後のアメリカ・ネイチャーライティングのバイブルと呼ばれる。

しかしその後もアメリカは自然を征服するような形で発展を続ける。南北戦争後には大陸横断鉄道が完成し（一八六九年）、一八九〇年には遂に工業生産が農業生産を追い越して、農業国アメリカは工業国に変貌する。これに伴い、人口の都市集中、巨大都市誕生（一例としてシカゴの場合、一八七〇年に二〇万人、八〇年には五〇万人、九〇年には一〇〇万人を超える）がおこり、さまざまな社会問題が発生する。これはステイーヴン・クレイン、セオドア・ドライサーなど自然主義作家の文学の主題となり、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてアメリカ文学の一大潮流を形成する。

工業国アメリカの誕生と裏腹に一八九〇年には「フロンティア消滅

山下 昇

宣言」がなされ、一八九三年フレデリック・ジャクソン・ターナーの「アメリカ史におけるフロンティアの意義」という論文が発表される。これに対して自然保護の必要性を唱える人々の運動が始まり、ジョン・ミューアらによる国立公園指定など自然保護運動が本格化する。

二、アメリカ黒人と都市

二〇人のアフリカ人が「輸入」され、労働に従事させられたのが一六一九年のことである。一六四一年のマサチューセッツ州を皮切りに、しだいに奴隷制が法制化され、一七〇〇年頃までにはほとんどの植民地において奴隷制がしかれ、アメリカ黒人は奴隷として強制労働に従事させられることになる。しかしアメリカ独立革命の機運が高まるのと並行して反奴隷制感情も強まり、一七七五年にはペンシルヴェニア州フィラデルフィアで奴隷制反対協会が設立され、北部ヴァーモント（州）では一七七七年に奴隷制が廃止される。その後、北部諸州においては次々と奴隷制が廃止され、やがて一八〇八年には奴隷貿易が禁止される。しかし皮肉なことにイギリスの産業革命の進展や綿花需要の急増などにより奴隷の需要は高まり、奴隷密貿易が横行するなどして、奴隷制は却って強化された。

一九世紀になると奴隷制廃止運動が盛り上がり、一八三〇年には自由黒人協会が、三三年にはアメリカ奴隷制反対協会がフィラデルフィアにおいて結成される。このように南北戦争前の奴隷制反対運動・廃止運動の中心は北部の都市であった。この奴隷制廃止運動の中で、フ

レデリック・ダグラスなど逃亡奴隷による奴隷体験記やハリエット・ピーチャー・ストウの小説『アンクル・トムの小屋』（一八五二）が発表され、美しく牧歌的な南部のプランテーションが黒人奴隷にとっては生き地獄であることが知られるようになる。

南北戦争終結（一八六五年）までは九〇％の黒人が南部に居住し、プランテーションで奴隷として「日の出から日没まで」無権利に働かされていた。奴隷解放によって移動の自由を得たものの、多くの者は分益小作制（シェアクロッピング）という新たな束縛によって南部に留まらざるを得なかった。一八九〇年ごろからの南部の工業化と農業の機械化の進展に伴い、農業から締め出された黒人たちが就業の機会を求めて北部へ移動し始める。この流れをアメリカ歴史上では大移動（グレート・マイグレーション）と呼ぶ。

この結果、ニューヨークやシカゴなど北部の都市に住む黒人が増加するが、彼らを待ち受けていたのは「分離すれど平等」という人種隔離による厳しい人種差別であった。都市におけるこうした黒人の生活を描いた文学が二〇世紀初頭に誕生する。とりわけニューヨークのハーレム地区を中心にして黒人による芸術・文化が花開き、この事象はハーレム・ルネサンスあるいはニグロ・ルネサンスと呼ばれる。

その後も南部から北部の都市への黒人の大移動は続き、第二次世界大戦後には黒人人口の約半分が北部の都市に暮らすこととなる。しかし人種差別のために黒人は貧困な暮らしを強いられ、都市のなかのゲットーに集住し、さまざまな問題に直面する。

一九六〇年代の公民権運動により黒人の法的地位は改善されたものの、次には黒人のなかで中産階級化するものと貧困層（アンダークラ

ス)の差が拡大する。失業に伴う貧困の人種化、女性化が喧伝されるように、都市における黒人貧困層の問題が現代アメリカにおける重大な社会問題となっていることはよく知られている。ビデオ『ボーイズ・ン・ザ・フッド』(一九九二)などはそのようすを的確に描き出している。また、ビデオ『ドゥー・ザ・ライト・シング』(一九八九)に見られるように他のマイノリティ集団との軋轢が増している。

三、アメリカ黒人文学と都市

——ユートピアとデリストピア

黒人文学において都市は「再生の場所」として特別な地位を占めてきた。黒人にとって南部の「田舎」は奴隷制の記憶と結びついている忌避すべき場所であった。これに対して都市は「希望」の象徴であった。もちろん都市がパラダイスでないことはすぐに明らかとなる。大移動から始まる黒人現代文学は、都市における黒人の幻滅の過程と苦闘をテーマとしたものが主流である。その代表的な作家と作品には次のようなものがある。

ハーレム・ルネサンス期

ネラ・ラーセン

『パッシング』

(一九二九年)

ジェシー・フォセット『プラム・バン』

(一九二九年)

ポスト・ハーレムルネサンス期

リチャード・ライト

『アメリカの息子』

(一九四〇年)

『ブラック・ボーイ』

(一九四五年)

『ひでえぜ、今日は!』(一九六三年)

アン・ペトリ

『ストリート』

(一九四六年)

ラルフ・エリスン

『見えない人間』

(一九五二年)

現代(ポスト公民権運動期)

グロリア・ネイラー

『プリユースタープレイスの女たち』

(一九八二年)

ネラ・ラーセンやジェシー・フォセット

の作品におけるパッシング

都市生活の特徴は人々の無名性である。南部の共同体においては、人々はそれぞれの出自について熟知しており、たとえいかに肌が白くてもある人物が黒人の血をひいていることを共同体の人々は知っており、その人物は黒人として行動することがさげられない。しかし都市においては、人々は互いの出身について無関心であったり、知ろうとしても知るすべがない場合さえある。このため色の白い黒人は自分の血統をいつわり、白人のふりをする事ができる。このように白い黒人が白人になりすますことを「パッシング」と呼び、グレート・マイグレーションによって都市に流入した黒人、あるいは都市に居住する黒人のなかには、白人になりすまして白人の生活を享受する者も出現する。しかしこの場合もなにかのきっかけで黒人であることが知られたり、黒人であることを表明せざるを得ない立場においやられたりして、悲劇的な結末を迎えるケースがあった。ラーセンの『パッシング』やフォセットの『プラム・バン』などはそのようなテーマを扱ったものである。

リチャード・ライトにおける暴力

地方から都市に移住してきた黒人を待ちうけていたものは南部と形を変えた人種差別であった。不十分な学校教育と農業労働の経験しかない黒人たちが都市において働くことができるのは、劣悪な賃労働や不安定雇用であり、まったく職につくことができないものが多数であった。そのため犯罪に手を染める黒人、とりわけ若者も多く、都市と暴力や犯罪とは切り離せないものとなる。ライトの自伝的作品『ブラック・ボーイ』は南部ミシシッピ州から都市への脱出をはかる黒人少年の物語であり、死後出版ではあるが実際は三〇年代に書かれた『ひでえぜ、今日は！』は、二九年の大恐慌で郵便局員としての仕事をなくす黒人青年の物語である。

代表作『アメリカの息子』は、シカゴの貧困家庭に育った黒人青年の暴力が白人女性の殺人というショッキングな形をとったもので、白人社会への抗議（プロテスト）を表現したものである。六〇年代のキング牧師を中心とする南部での公民権運動と並行する形で北部ではマルカムXらのブラック・モスリム運動や都市暴動の頻発が見られ、やがてはブラック・パワーやブラック・パンサー党などの黒人中心主義、黒人過激派が白人と敵対するようになるが、この小説はいわばその予兆のようなものである。

ラルフ・エリスン

『見えない人間』におけるハーレム

ラーセンやフォーセットのパッシング小説の際に述べたように、都市生活には無名性と暴力がつきものである。エリスンの『見えない人間』はいままで見てきた二〇世紀前半の黒人の歴史を総ざらいするような作品である。主人公は、現在はニューヨークのハーレムに住んでいるが、子ども時代と学生生活は南部の田舎で送っていた。その主人公が、南部の大学を追放されるような形でニューヨークに働きにくる。ペンキ工場で働いてみるが、労働者を守ってくれるはずの労働組合さえ人種差別的で、彼の加盟を認めてくれない。怪我をして工場をやめた彼は次にひよんなことから友愛団に誘われて加盟する。

この政治組織は白人・黒人を問わず貧しいものの味方のはずだが、実際はやはり白人主導であり、黒人解放をめざす別組織とは対立抗争を繰り返している。また女性解放を唱えるものの、実態は性的に利用しているのみである。主人公はそのような組織に失望し、いまや地下室に潜んでジャズを聴きながら「冬眠」している。たまに外に出ても彼は白人にとつては存在しない「透明人間」のようなものであることを実感する。この小説は圧倒的な白人支配のもとで、分裂抗争するばかりの黒人運動への失望と無力感に満ちている。

四、アン・ペトリ『ストリート』 におけるニューヨーク

アメリカの文化が瞬時に日本に紹介される時代に生きている我々としては、日米の情報ギャップがきわめて小さいような錯覚をもっている。しかし実際のところ彼我の情報ギャップは相当程度のもので、日米の国民がそれぞれの国について知っていることは氷山の一角にすぎないと言つて差し支えないであらう。

ここでとりあげるアン・ペトリという作家は日本ではほとんど知られていない作家である。(しかし驚くべきことに、これから採りあげる作品は、一九五〇年に『街路』という題で翻訳出版されたことがある。) ペトリには三冊の小説と一冊の短編小説集、数冊の子ども向けの著作がある。彼女の第一作『ストリート』(一九四六)は一〇〇万部以上売れたベスト・セラーであり、ホートン・ミフリン賞を受賞している。しかし彼女のことやこの小説のことを知っている日本人は非常に少ない。

ペトリの『ストリート』は、リチャード・ライトの『アメリカの息子』と比較される。確かに都市に住む貧しい黒人を自然主義的筆致で描きだした点はライトに共通する面がある。またこの作品をヒロインのルーティ・ジョンソンの人種差別社会における悲劇と読むことも可能である。筆者も初めてこの作品を読んだ時に、「これはリチャード・ライトの女性版だ」と思った。だが、この小説はヒーローがヒロインに置き換わっただけではない。テーマそのものがもっとジェンダー的視点から選ばれていて、現代的である。

都市に生きる黒人が仕事を見つけることがいかに困難であるか、とりわけ女性の場合にどうだろうか、というテーマに取り組んだのが『ストリート』である。この作品では主人公ルーティは子どもを抱えて離婚し、ハーレムの狭い汚いアパートで辛うじて生活している。彼女は何かもつといい仕事について広いアパートに引越し、子どもをきちんと育てようとするが、彼女の願いはなかなか実現されない。歌手になつてもつと収入を得るという話も白人に邪魔され、ルーティは自分をだました黒人男性を殺してシカゴへ逃亡せざるを得なくなる。この小説は都市を仕事と生活という側面から描き出している。この作品が都市の黒人を描いた文学の典型というわけではないが、現代にも通用する黒人女性の都市生活の困難を描いている点を以下に詳しく見ていきたい。

黒人女性と仕事——ルーティの価値観

この小説をルーティ・ジョンソンの物語として読むのは当然といえば当然である。書き出しは一九四四年一月、ニューヨーク市一六番街の描写で始まり、次のページでルーティが登場し、彼女の話が開始される。全一八章のうち彼女に視点を合わせて語られるのが一章におよび、最後の章も彼女がブーツ・スミスを殺害してシカゴに逃亡する場面で終わる。彼女がこの物語において中心的な位置を占めていることは明らかである。そこでまずはルーティについて検討してみよう。

この作品について批評家のバーバラ・クリスチャンは「生活を切り

拓こうと苦闘する都会の黒人母親像を描いた最も初期の作品の一つ」(65)と呼び、その先駆的業績を讃えている。またキャロル・ヘンダーソンは「インナー・シティで生き延びるために苦闘する黒人母親を描いた最初の女性小説家」(115)と作者を評価し、作品の現代性を指摘している。そのように評価される登場人物であるルーティは、しかし、願望を果たせず、あげくの果ては殺人を犯して、他の都市への逃亡を余儀なくされる。彼女の物語が示しているのは貧困の犠牲者としての悲劇といっても差し支えない。では一体何が彼女をそこへ追い詰めたのだろうか。

根本のところに当時のアメリカの人種差別があることはいうまでもない。ルーティが何度も繰り返すように、彼女の不幸の原因は黒人に仕事を与えないアメリカ(白人)社会である。(88)一九三八年に夫のジムが失職し、どうしても職につくことができない。やむなく彼女が白人家庭の住み込みメイドとして働くことになる。不況の三〇年代とはいえ、彼女が推薦状を依頼したイタリア系移民ビッツィニ夫人の店は成功し、今や豊かな生活を享受しているし、住み込み先のチャンドラー家も紙製品製造で潤っている。職がなくて困窮しているのは黒人ばかりである。夫に仕事があれば妻が働くしかないのだが、黒人女性に宛がわれる仕事は、自分の家庭を離れて白人の家庭のために働くメイドである。生計を支えるために自分の家族の生活を犠牲にして働いた結果が、夫の浮気を招き、子どもをつれての別居へとルーティを追いやる。

子どもと二人の生活を成り立たせるために彼女は洗濯のプレスの仕事をしたり、タイプを習ったりしてようやく文書整理係の職を得たの

だった。しかしその職で得られる賃金ではハーレムの狭くて汚いアパートに住み、かろうじて食べていけるだけである。もつといいアパートに引っ越して安定した生活をしたいと望む彼女にチャンスが到来するが、それは一種のわなである。ジュントーという白人の経営する酒場でブーツのバンドで歌手として歌わないかという話で、収入もアツプするはずであった。しかし彼女に目をつけたジュントーの計略で、歌手として収入を得るという話は実現されない。この話は所詮、若くて美しいルーティを自分のものになりたいという白人男性や、その分け前にあずかりたいという黒人男性の口実にすぎなかったのである。若い黒人女を見る目が画的なのは男たちに限っていない。彼女がチャンドラー家で働いていたときにも、「若い黒人女はみんな売春婦だ」(65)というのがチャンドラー夫人の友人たちの自動的な反応であった。このように黒人女性が能力をいかせるまともな仕事につくのを妨げているのは、白人紳士は黒人女を求めているし、黒人女も白人紳士を求めているという「黒人女と白人紳士」(62)にまつわる性的「神話」である。黒人女性であるミセス・ヘッジズでさえ、売春宿を経営し、「少しばかり余分のお金がほしいければ白人男性にやさしくしないと」とルーティに勧める次第である。

彼女の父ポップも無職で、密造酒販売で辛うじて生活しているばかりで、それさえ立ち行かなくなつて彼女たちのもとに居候するほどで、当てにならない。彼女をレイプしようとして襲いかかる管理人ジョーンズは、失敗するとその恨みからルーティの息子バブを騙して悪事に誘い込む。このように彼女を取り巻く男たちは誰ひとりとして彼女の助けにならない。彼女は回りの黒人女性たちにも違和感を感じて

つきあいをしようとしな。こうして彼女は孤立無援の状態に陥ってゆく。彼女がそのようなところに追い込まれるのは、結局のところ白人の奸計や無理解であることが分かり、アメリカ社会においては白人と黒人のあいだには「壁」があり、黒人は壁の中に閉じ込められていることを実感するのである。(430) (このモチーフはエリスンの『見えない人間』に引き継がれる。)

ルーティは最後にこの悟りに到達して、怒りの余りに殺人を犯すのだが、そこにいたるまでの彼女はあまりにイノセントだった。彼女が白人的な価値観や倫理観にとらわれていることは随所に描かれている。ベンジャミン・フランクリンの刻苦勉強に倣えば自分も成功できると信じ、チャンドラー家でのメイド生活を通して白人中産階級のアメリカーン・ドリームに染まっていく。しかしそのアメリカーン・ドリームは白人にのみ許されたものであることをルーティは理解していない。

ルーティがあまりに白人的価値観にとらわれすぎていたためにこのような悲劇を招いたことの指摘は多くの批評家によってなされている。風呂本淳子はゲイル・ワーストの論を引きながら、この作品におけるベンジャミン・フランクリンのメタファーの虚妄性をいかに作者が意図的に利用しているかを説明している。またカルヴィン・ハーントンは作者がルーティのみならず他のアンダークラスの人々女性を描いていると述べるとともに、ルーティの「階級（および皮膚の色）の濃淡」による偏見(80)を指摘している。さらにヒラリー・ホラデイは、ルーティは人間関係から常に逃避しており、それが彼女の不幸をもたらしたと主張している。(50)これに関連してフアラ・グリフ

インはこの作品中における祖母の声(教え)の重要性を指摘し、ルーティが黒人的価値を学ばず、コミュニティをつくることができなかった点を批判している。(214n)

このように、ルーティの悲劇は人種差別社会における黒人の立場を忘れた故にもたらされたものであることの指摘は核心をついている。しかし白人にとってさえアメリカーン・ドリームはしよせん「夢」であるという現実がすでに存在している、ということに彼女が思いをはせる場面がある。児童保護観察所に収容されている息子バブに面会に行った際に、収容されているのは全員黒人だと思っていたが、三人の白人がいることに気づくとルーティは、このような目にあうのは人種のせいではなくて、貧しさのせいかもしれないと思う。(408)世の中には白人でも貧しい者がいるというあたりまえの事実には彼女はいきあたる。このことを考慮に入れるならば、彼女の怒りは貧困を生み出す元凶である人種主義はもちろんのこと、社会全体に向けられているとも考えられる。

『ストリート』の中心的人物がルーティであることは確かだが、ルーティだけに目をむけていると、この作品全体が表現しているものを読み取りそこなうことになりかねない。キース・クラークやマージョリー・ブライスが述べるように、この作品はルーティの単なる犠牲の物語ではなくて、黒人女性の共同体を描いたものである。この小説は何気なしに読んでいけばルーティをヒロインとする物語だと思ってしまうのだが、最初に述べたようにルーティに焦点を合わせた章が半分以上を占めるとはいえ、他の章においてはジョーンズ(四章)、ミ

ン(二章)、ブーツ(一章)、ミス・リンナー(一章)というようにその周辺人物たちに焦点を合わせた語りとなっている。また語りの中心というわけではないが、ミセス・ヘッジズとジュントーの物語も見逃せないエピソードとして語られている。それぞれの人物が矛盾する点をもっていたり、一面的でない性格や態度をみせていることが、この物語全体を通して示される。この小説は白人社会とその犠牲となっている黒人社会の無力さや怠惰に憤るルーティの物語を機軸にしながらも、単なる人種差別批判ではなく、その中で生き延びる人間を描く物語となっている。また批判されているのは基本的には白人社会であるが、黒人男性たちも批判の対象となっている。

この作品は「黒人女が黒人男を殺す最初の物語だ」とハーントン(59)が述べているのは正確ではないが(ゾラ・ニール・ハーストンの『彼らの目は神を見ていた』(一九三七)もそうである)、この小説において黒人男性も弾劾されているのは事実である。このテーマは、より明確には、後にアリス・ウォーカーが『カラーバブル』(一九八二)などで強調することになる。インナーシティにおけるシングルマザーの苦闘というテーマや、黒人男性批判というモチーフは今日の黒人文学にも有効である。その点から言えばベトリの『ストーリー』は先見的であつたし、もっと高く評価されるべき作品である。

引用・参考文献

- 加藤恒彦ほか編『世界の黒人文学——アフリカ・カリブ・アメリカ』鷹書房弓ブレス、二〇〇〇年
- チャールズ・スクラッグズ著、松本昇ほか訳『黒人文学と見えない都市』

彩流社、一九九七年

風呂本惇子「黒人女性作家の作品における〈マイ・ホーム〉の悪夢」川上

忠雄編『文学とアメリカの夢』英宝社、一九九七年

本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波新書、一九九一年

山下 昇編『冷戦とアメリカ文学』世界思想社、二〇〇一年

ラルフ・エリスン著、松本昇訳『見えない人間』(Ⅰ、Ⅱ)南雲堂フェニックス、二〇〇四年

Andrew, Larry R. "The Sensory Assault of the City in Ann Petry's *The Street*."

The City in African American Literature eds. Hakutani, Yoshinobu and

Robert Butler. Cranbury, NJ: Associated UP, 1995.

Christian, Barbara. *Black Women Novelists*. Westport: Greenwood Press, 1980.

Clark, Keith. "A Disaff Dream Deferred?": Ann Petry and the Art of Subversion"

African American Review vol. 26, No. 3.

Griffin, Farah Jasmine. "Who set you flowin'?" : *The African-American Migration Narrative*. New York : Oxford UP, 1995.

Hemion, Calvin C. *The Sexual Mountain and Black Women Writers*. New York :

Doubleday, 1987.

Holladay, Hilary. *Ann Petry*. New York : Twayne Publishers, 1996.

Wurst, Gayle. "Ben Franklin in Harlem : The Drama of Deferral in Ann Petry's

The Street" *Deferring a Dream* ed. Buelens, Gert and Ernst Rudin. Basel/

Boston/Berlin : Birkhauser Verlag, 1994.

Petry, Ann. *The Street : A Novel*. Boston : Houghton Mifflin Company, 1946.

Pyse, Majorie. "Pattern Against the Sky : Deism and Motherhood in Ann

Petry's *The Street*" *Conjuring : Black Women, Fiction, and Literary Tradition*. Eds. Pyse, Majorie and Hortense J. Spillers. Bloomington : Indiana

UP, 1985.

Henderson, Carol E. *Scurring the Black Body*. Columbia : U of Missouri P, 2002.